

鈴木正崇(編)

## 『南アジアの文化と社会を読み解く』

東京：慶應義塾大学出版会、2011年、xi + 476頁、2100円＋税、ISBN978-4-7664-1902-3

田辺明生

これは、読んで楽しく、ためになる本だ。南アジアの文化と社会のさまざまな諸相が、具体的で鮮やかなイメージや興味深いエピソードとともに語られており、現地と長くつきあってきた専門家ならではの、鋭い洞察や分析と相まって、読み物としてとても魅力的なものとなっている。

本書は、2010年の慶應義塾大学東アジア研究所講座に基づく。一般向けの講座をもとにしているので、語り口は平易でわかりやすい。と同時に、それぞれの執筆者の、それまでの研究の奥深さが醸し出す香りのようなものを端々から感じ取ることができる。

執筆者は、いずれも長期にわたる臨地研究をされてこられた方ばかりであるが、文化人類学、歴史学、哲学、思想史、音楽学、映画学など多様なディシプリンにまたがり、また若手から重鎮までさまざまな世代の研究者からなっている。これは、日本の南アジア文化・社会研究の層の厚みとバラエティの豊かさを示しており、このような書物が日本で編めるといふこと自体が、一種感慨深いものがある。

編者の鈴木正崇氏によると、本書は、「多面的な顔をもつ現代の南アジアを民衆の実態から読み解こうと試みる」ものであり、その目的は十分に果たしていると評価できよう。ただし、各章のスタイルや表記そして質にはかなりばらつきがあり、南アジア（研究）の多面的な顔を映すのにはよいかもしれないが、論集としては一貫性に欠ける側面がある。

「まえがき」では、鈴木氏が、本書の意図や各章の内容を、簡潔にして要を得た紹介をしている。また「民衆文化の柔軟性・多焦点性の再発見と活用」の必要性という指摘や、「文化は交流の次元を越えて、還流と異種混淆による新たな創造へと向かうであろう」という展望は、きわめて興味深い (p. v)。ただ惜しむべくは、この「まえがき」があまりに短いことである。「柔軟性」「多焦点性」「還流」「異種混淆」などというキーワードは、まことに示唆に富んでおり、本書の各章との内容とも響

き合うものである。であるからこそ、その内容についてもうすこし突っ込んだ議論をしていただきたいかった。そうすれば、多元的な各章のつながりがより明らかになったのではないかと思われる。

以下では、本での構成順序にこだわらずに各章の紹介とコメントをしていく。

「インド 祈りの造形—かたちから意味を読み解く—」(小西正捷)は、床絵、プロト(誓願)儀礼、壁画、民俗画の世界とその変容について、圧倒的ともいえる非常に豊かな民族誌的データとともに描いている。小西氏の指摘で重要なのは、民俗造形の世界では、文学、音楽、絵画、彫刻、儀礼、神話などが渾然一体となって相互的に関わりつつ、総体的な意味をつくっていたということである。それらの「祈りのかたち」のつながりを読み解くことによって、ひとびとの世界観や価値観にも深く分け入ることができた。しかし、現在では、各ジャンルが分離独立して専門化し、また産業化による世俗化が起きており、民俗造形は豊かな意味を失ってしまいつつある、と小西氏は指摘する。

いわゆるグローバル化はたしかに断片化と脱文脈化、そして意味喪失をいったんはもたらす。しかし、かたちが発展的に継承される限り、造形の美と力はただちに失われることはない。だからこそ、現代世界のなかで、いったんは断片化したかたちが、異種混濁的なつながりと再文脈化において、新たな意味を生み出す可能性があるのではなからうか。ただしそれには、文化の継承者の深い感性と創造力が必要とされ、容易なことではない。

「民衆ヒンドゥー教とは何か—インド・ラージャスターン州メーワール地方の事例を中心に—」(三尾稔)は、ラーマ神を称える集団儀礼、憑依する神や霊への信仰、スーフィー聖者廟の異種混濁的な様相などをとりあげながら、民衆ヒンドゥー教の現世利益的性格、儀礼の簡索性、信仰対象の具象性、他宗教との越境的可能性を論じる。どの事例もとてもおもしろいが、私が特に興味を覚えたのは、ヒンドゥー民衆は力のありそうな神ならばどれをも尊崇するという「向複性 polytropy」という性格の指摘である。多様性を柔軟に越境的に受け入れていくという南アジアの文化の特質をここにみることができるかもしれない。ただし三尾氏は、民衆ヒンドゥー教が、イベント化、商業化、ヒンドゥー・ナシヨナ

リズムとのつながりのなかで、変質してしまう可能性も指摘している。

外川昌彦氏の「ベンガルのバウルの世界—フォキル・ラロン・シャハにおける多元的な宗教世界と身体修行—」は、バウル聖者のラロンの歌や教を紹介しながら、彼が、普遍的な宗教性の多元的な現れとして、ヨーガ、密教、ヴェシユヌ派、スーフイズムなどの多様な修行体験への理解を示していたさまを見事に描写する。またこうした宗教の普遍性と多元性の双方への感性が、ラロンに限らず、南アジアにおけるさまざまな宗教者やその教えにみられ、それらのゆるやかなつながりが、イスラーム、ヒンドゥー教、シーク教、仏教などを結びつけていることを指摘する。南アジアにおける宗教の多元性と越境性がいかに可能になっているかについて教えられるところが多い。

「インドの聖地と環境問題—聖地バナーラスにおける生活と信仰をめぐる—」（宮本久義）と「インドの移民・聖性の移動・環境変化—聖なる水、ガンガー・ジャルをめぐる—」（重松伸司）は、ガンガー川（宮本氏はガンジス川と表記）の水質汚濁をめぐる問題と対策を、特にバナーラス（重松氏はワーラーナシーと呼ぶ）を舞台に描くものである。導入として、宮本氏は水をめぐるインドの自然観とそのなかのガンジス川およびバナーラスの位置づけについてインド学の立場から論じ、重松氏はガンガー・ジャルが国際的に通信販売されている状況を移民研究の立場から紹介・分析しており、いずれもとても興味深い。両者共に指摘するのが、ガンガーは聖なる川だから汚染されているはずはないという誤った慣習的思考の問題であり、同時に、人々の宗教的感情を理解することの必要性である。後者はたとえば、河川汚濁を防ぐために電気火葬設備を設置しても、薪で火葬されてガンガーに流されることを望む民衆は使わないということだ。政府の対策がなかなか功を奏しないなかで、宮本氏と重松氏が共に注目するのは、ローカルな社会運動である「清浄なるガンジス運動」の可能性である。これは、当事者が自らの自然観について批判的に再認識し、自らの宗教的感情と、現状においてなすべきこととのすり合わせを行う試みである。宗教と科学そして経済を調和させることはとてもむずかしく、しかし、現代世界全体にとって重要な課題であろう。

宗教が公共的な役割を果たしうることを、具体的な事例から論じているのが、「パキスタンにおけるムスリムのNGO—ハムダルドの理念と活

動一」(子島進)である。子島氏は、イスラームが社会的な弱者を助ける善行を宗教的責務として定めていることを指摘し、そうしたイスラーム的価値観に根ざすNGOとしてハムダルド財団の活動を紹介する。ハムダルドは、植民地インド期におけるムスリムの文化・社会運動のなかで生まれ、ユナーニーの製薬会社「ハムダルド製薬」をワクフ財源としながら、医療・教育・文化における活動を展開している。ハムダルドの活動は、公共的な普遍性もちながら、イスラームの価値観や制度に支えられたものでもある。近現代南アジアにおける公共文化の構築の一端を宗教が担ってきたことがうかがえる点で、きわめて興味深い。

一方、宮本万里氏の『『仏教王国ブータン』のゆくえ—民主化の中の選挙と仏教僧—』は、宗教の位置づけをめぐるブータン王国のジレンマを描き出しており、興味深い。ブータン王国は、自らの国民文化として環境保護をうちだし、そこに果たす大乘仏教の積極的な役割を強調する。しかし他方で、民主化を推進するなかで、宗教と政治を分離するために、仏教僧や宗教組織成員には選挙権を与えないこととしている。ブータン王国は、仏教的価値を自らの国家的アイデンティティとしつつ、世俗的な民主政治から宗教者を排除しようとする。ここでは仏教と民主主義という、ブータンがどちらも自己のものとしようとする二つの価値のあいだで相克が生じている。これは、生活の中の生きた宗教が問題なのではなく、国家による宗教の客体化とその道具的使用から生じた困難であるように思われる。

「スリランカの民族問題とNGO活動」において、澁谷利雄氏は、シンハラ人とタミル人の民族紛争の要因を検討し、その背景に仏教と結びついたシンハラ・ナショナリズムがあると論じる。また2004年の津波災害後の復興支援に携わった経験から、復興活動にも民族間の利害のせめぎあい如実に反映されていたこと、過剰な外国依存があること、政治家、官僚、NGOの癒着がみられることを指摘している。そして、自立的かつ持続的な復興のために、NGO活動において、被災地の慣習や意志を活かす方法が必要であるとし、企業的な展開の可能性と同時に、功德を積む行為など宗教にもとづいたボランティア力に注目している。宗教は、集団アイデンティティやナショナリズムと結びついて排他的・暴力的に働かると同時に、人々をポジティブな行為にも動かす。具体例に基

づいた、その両面の指摘が興味深い。

「ヨーガの要諦とヨーガのグローバル化をめぐる」(山下博司)は、ヨーガの思想と歴史的展開を平易にしかし深く解き明かし、さらに参与観察で得た知見をつうじて、現在のヨーガの変容について考察する。インドの宗教には、神々を称え祈る流れにたいして、瞑想を通じて内面に真の自己を再認しようとする流れがあり、それがヨーガである。しかし現在、ヨーガは、グローバル化のなかで多種多様なバリエーションが出現している。特にシンガポールでは、諸地域の健康法や修練法と組みあわさった多種多様なヨーガがあり、宗教、健康、病気治療など目的も様々であることが紹介されている。山下氏は、ヨーガがホリスティックな体系として継承されるのが一番だが、それがかなわない場合は、次善の策として、シンガポールにおけるように上質な選択肢を多数用意することが望ましい、と論じる。グローバル化にともなう全体性の喪失を経て、諸断片からわたしたちは何を生み出せるのかという問題である。

私自身は、現在のグローバル化のなかで、伝統的なかたちでの全体性がいったん失われるのは必然であり、それは避けることができないと考えている。そうした状況のなかでわたしたちは文化をどのように継承・再創造していけるのか。異種混濁的な交流を通じて新たな文化を生み出すには、多様なかたちのあらわれを尊重すると同時に、それらのかたちの背後にある普遍的な意味への感受性が必要ではないかと思われる。宗教で言うならば、その最も大切な部分は、自らを超えるあるいは自らの内奥にある、聖なる存在や力とのつながりの感覚あるいはそれへの希求にあるのではないだろうか。それを外に求める場合は祈りとなるし、内に探求する場合は瞑想などの修行となる。ただしそうした普遍性への媒介は多様であるし、多様であってこそ、この世は美と力にあふれる。特定の媒介を集団的に特権化することは、排他性と暴力を生むし、普遍性から遠ざかることでもある。わたしたちに必要なのは、多様な価値、制度、技術、実践のかたちを継承し、さらに近現代に発展した科学技術や異文化交流の可能性をも加えて、それらを異種混濁的に再統合し、多元性と普遍性の双方を備えた新たなグローバルな文化のかたちを創造していくことであろう。

南アジアにおける多様性と統一性そしてそのグローバルな可能性を

より正面から論じたのが、辛島昇氏の「インド文化の多様性と統一性—『ラーマヤナ』とカレー料理を例として—」である。インドの料理は地方やカーストなどによって多様であるが、そのどれも、各種のスパイスを用いた総合混合調味料によって味付けされたカレー料理であるというゆるやかな統一性がある。同じように、本来「ラーマ物語」は時代、地方、人々の立場によって多様であるが、最近のインドでは、特定宗派の「聖典」としてのヴァールミーキの『ラーマヤナ』とトゥルシーダースの『ラーム・チャリット・マーナス』によって標準化されつつある、と辛島氏は指摘する。グローバル化においても、多様性を尊重しながら全体の豊かさをめざして緩やかに統一されるのが望ましく、それをインド文化から学ぶことができるという辛島氏の論に共感する。

「インド音楽の世界—楽器に見る人々の『こだわり』—」(田中多佳子)は、楽器の世界から、インド文化の多様性や柔軟性を論じている。芸能と素材の豊富さから、「宝庫」ともいえるほどインドの楽器は多様である。音色にはつよくこだわるものの、外来楽器や電子楽器の導入には柔軟であり、他方で、インド音楽らしさは決して失わないということも、とても興味深い。さまざまな楽器の種類や作り方そしてエピソードを読んでいるだけでも楽しいが、インド音楽が、越境性や柔軟性ととも、その独特のかたちの継続性を有するという議論は重要である。これは、これまでみてきた宗教や料理などにもあてはまることで、インド文化の一般的な特性としていえることだろう。またインド音楽は宗教とも結びつきが強いことが指摘されているが、これは音楽が人々の祈りや願いを表現し鑑賞する媒体となってきたことと関連しているのではなからうか。

近現代インドにおいて、民衆のより世俗的な願いや欲望を写しだし、カタルシスと共に経験する媒体となってきたのが、インド映画であった。「インド映画100年の魅力—世界最多製作国の輝きと変遷—」(松岡環)は、インド映画の歴史的展開とその変容について全貌を示しながら、映画と社会の関係について考察している。目配りはきわめて広く、情報量も豊富である。インド映画は、伝統演劇を踏襲しており、そのため、歌と踊りが入り、娯楽要素が網羅され、上映時間が長いという特徴を有する。こうした娯楽映画が全体の9割以上を占めるという。さらに映画が、観客の学習と愛国心発揚の場ともなっていたことが指摘される。インド映画は、近代的な媒体によってかたちづくられた民衆文化の最たるもの

であったが、それが、どのように変容していくか、変わりつつある新たな人々の願いを受けとめる器となれるかが注目される。

「北インドの結婚式の変化—チャイからコーラへ—」(八木祐子)は、近年の社会変容に伴って、結婚式の内容やそこで歌われる歌などがどのように変化しているかを生き生きと描写している。婚姻圏は拡大し、ダウリーは高騰し、儀礼ではジャイマール婚(花輪交換)が加わって、花嫁が顔を隠すことはなくなったという。若い女性たちの歌は、豊饒力を増すという本来の目的のためではなく、「花婿の写真を見せて」とか「子どもの勉強を修士号まで」とか自分たちの希望や願いを表現するものになっている。そして夫婦単位の行動が増え、若い妻は夫と対等に話し、携帯電話で実家と連絡を常にとるなど、ジェンダー関係や家族関係そのものも大きく変化している。

粟屋利江氏の「南インドのカーストとジェンダー—ケーララにおける母系制の変容を中心に—」は、ナーヤルを中心とした親族と婚姻の形態にかかる、歴史的な変容を描いたものである。ケーララの母系制においては、女性の婚姻が家族によって戦略的に決定されてはいたものの、婚姻の解消や再婚はかなり容易であった。また女性は生家に持続的な「自分自身の居所」を有していた。しかし、英領期において、母系制は解体される。当時は進歩と評価されたが、それはカースト内婚というメインストリームに合流すると同時に、夫婦・親子の紐帯を基礎とする近代家族を希求しての動きであった。ただ現在でもケーララにおいて娘の相続権はきちんと認められているし、娘の誕生を悲劇とするメンタリティも浸透していないなど、「母系制的なるもの」は継続しているようだ。人々の意図的な改革の結果についての評価は歴史のなかで変化するものである一方、長期に培ってきた文化パターンの薫りのようなものは引き続き残って行くことは興味深い。それでも人間は、よりよい社会と家族のかたちを求めて、歴史を作っていくことをやめないだろうし、やめるべきでもない。

最後に、「流動するネパール、あふれるカトマンドゥ盆地」(石井溥)は、ネパール社会の変化を、特に民族やカーストに注目しながら、網羅的に記述したものである。近年の変化としては、ネパール人意識の定着という意味での「ネパール化」、主権在民や王制廃止をもたらした「民主化」の流れが重要だが、特に興味深いのが、2003年に導入が決定さ

れた留保制度と、「人の再範疇化」をめぐる話題である。問題は誰が優遇措置を受けるかである。ジャナジャーティ（先住民族）、ダリット、マデシ（南部平地民）などのグループの確定、また優遇の必要度に応じたジャナジャーティの5段階への分類は、留保制度に必要な措置とはいえ、民族やカーストの明確化をもたらし、社会集団間の競争・対立を引き起こす。国家が、多様な社会集団を認定したうえで、それらのあいだの格差を是正しようとすることは、現代という時代において必要なことであろう。ただし、それは、公的な範疇の実体化をとまなうものであり、範疇とその境界をあるていど曖昧にしたままで多様性と格差を維持してきた従来の社会システムを大きく揺るがせる。

多元性と普遍性の両方の価値が実現されるような社会は、グローバル化の時代においていかに実現できるのか。南アジアの文化と社会はその可能性を考える上でおそらく最も適した場のひとつであり、本書の諸論考はその探求の過程にまつわる困難と可能性についてのヒントに満ちている。

たなべ あきお ●京都大学大学院・アジア・アフリカ地域研究研究科教授